

ハービー・ハンコックの通算 30 作目のリーダー作。間に V. S. O. P. クインテットの作品が 2 枚入っているが、前年の『フィーツ』(27 作目) が全編ディスコ・ミュージックでガックリしたハービー・ファンには本作を聴いて胸のすく思いがするはずだ。「やはりハービーは、こうでないといけない」と。

本作は今までの様々な未発表テイクにハービーが手を加え、少し新録も入れたアルバムで、意外と人気の高い云わばハービーの「裏名盤」である。なんといっても嬉しいのは、全編インストゥルメンタル・アルバムで、ハービーがキーボードを弾きまくっていること。

1 曲目の「スパイラリング・プリズム」は、バイロン・ミラー (b)、レオン・チャクラー (ds) などのメンバーから推定すると、『サンライト』(1977 年~78 年) のセッション。ゆったりしたビートにハービーのシンセが乗って、心地好い。やがてエレピが絡み、シンセが躍動し、リズムも動きが活発になる。「カリブソ」は、ロン・カーター (b) とトニー・ウィリアムス (ds) に、シーラ E が加わった演奏だ。おそらく『ハービー・ハンコック・トリオ』(1977 年) の演奏に、ハービーのシンセとシーラ E のパーカッションを追加したもの。トニーのエネルギッシュなドラムに乗って、ハービーが縦横に疾走する。そうそう。こういうハービーが聴きたかったのだ。「ジャスト・アラウンド・コーナー」は、『モンスター』(1979 年~80 年) のときの

セッション。切れのいいファンクのリズムに乗って、ハービーのシンセが楽しそうに駆け巡る。次いでクールなハービーのエレピ・ソロも格好いい。そして「4 AM」は、遂にジャコ・パストリアス (b) とハービー・メイソン (ds) が登場する。これは、『サンライト』(1977 年~78 年) のセッションだろう。珍しくジャコは、バックに回って派手な動きをしない。まるでアンソニー・ジャクソンのような。静かに盛り立てながら、要所でクライマックスのおぜん立てをする。これぞプロの仕事である。淡々とハービーを乗らせる職人芸は流石である。「シフトレス・シフトレス」は、ハービー曰く『『ヘッドハンターズ』の未発表テイク』とのこと。しかし日本で録音した『ダイレクト・ステップ』に収録されていた曲なので、我々日本人は既に知っていた。どんどん盛り上がっていく曲だが、ハービーのエレピの暴れ方、爆発力が実に気持ちいい。ラストの「テクスチャーズ」は、このアルバムのために新たに録音された唯一の曲。ハービーがすべての楽器を演奏している。ドラムは、「リン・ドラム」を使用。ジャケットにも「すべてのブラス・パート、ストリング・パート、リード・ギター、スティール・ドラムなどは、ハービーがシンセサイザーでプレイしている」と書いてある。「テクスチャーズ」は、とても一人とは思えぬ見事な演奏。シンセに生ピアノが絡み、美しいサウンドになっている。

JAZZCAT — RECORD

インターネット専門店です。

レコード 5,000 枚以上を写真で掲載中
お店の感覚で捜せます。

- ・ ジャズ中古レコード販売 (ボーカルも充実)
- ・ YOKOHAMA-JAZZCAT レーベルより CD 発売
- ・ 日本人アーティストの CD・レコード販売 (直接アーティストから依頼されています)
- ・ オーディオコーナー (売りたい・買いたい・求む)
- ・ 中古 CD 販売

<http://www.jazzcat-record.com>

〒220-0051 横浜市西区中央 2-1-13 明光中央ビル 202

TEL&FAX 045-312-4238

Email: yokohama@jazzcat-record.com



【One of Another Kind / 楽曲解説】 解説 by 田中 裕士 (Pianist)

■録音データ

収録 CD : Live under the Sky / V. S. O. P. The Quintet

1979 年 7 月 26 日 Recorded Live : 田園コロシウム / 東京

Herbie Hancock (pf), Ron Carter (b), Tony Williams (ds)

Freddie Hubbard (tp), Wayne Shorter (ts)

■V. S. O. P. The Quintet について

このグループは、ハービー・ハンコック氏の元マネージャー兼プロデューサーであった、デヴィッド・ルービソン氏が提案したアイデアで、その意図は 1976 年にハービーのグループが Newport Jazz Festival に出演した際に、ハービーの持つ音楽の多彩さを聴衆にアピールする為に、Head Hunters や VSOP といった多様な音楽スタイルをプレゼンテーションしようといった企画がその始まりであったと聞いている。

“Very Special Onenight Performance” というグループ名の如く、たった一夜のスペシャルセッションのほずであったが、この時の演奏内容があまりにも素晴らしく、多くのファンの要望もあって、その後パーマネントグループとしての『V. S. O. P. Quintet』が結成され、1976 年~1979 年迄の 4 年間に渡り世界各国で活動することになったそうである。演奏形態、その音楽的主眼は、1965~1969 年の Miles Davis Quintet にとても近いものがある。当時のマイルスクインテットからマイルスが抜けて、フレディ・ハバードが入団したという形が、この『V. S. O. P. Quintet』なるグループとなるわけである。

■豪雨の中の Live Under the Sky 1979

使用音源は 1979 年の豪雨の中の田園コロシウム (現在は閉鎖) での壮絶なライブパフォーマンスの記録で、この公演を目の当たりにした愛好家ファン達の中では、“生涯忘れることのできない伝説のライブ”として個々の命に刻み込まれ語り継がれている。

この演奏が行われた当時、ハービーが 39 歳、ウェインが 46 歳、フレディが 41 歳、ロンが 42 歳、トニーが 34 歳であったと記憶するが、会場の田園コロシウムでは豪雨にも関わらず、観客は傘をさし、雨合羽を着用し、この凄まじい 5 人のパフォーマンスに歓喜絶叫していた様子は、その記録音源 (CD) から十分に毛穴で感じ取ることができよう。仮にこの状況下で、キース・ジャレット・トリオがバラード曲から演奏を始めていたなら (?) などと意地悪な仮定をしてしまうと、このような伝説になるような感動的な野外ライブにはならなかったのではなかろうかと私はほぼ推測する。

(苦笑) — 1979 年当時弱冠 16 歳であった私は、関西在住であったので、この公演を生で拝聴拝見することは叶わなかったが、ほぼリアルタイムの 2 週間後に FM のオンエアで拝聴し、あまりの衝撃に感性を驚愕みにされ、痛くショックを受けたことは一生忘れることのできない貴重なジャズの原体験の 1 つでもある。

■楽曲構造、ハーモニーチェンジについて

フレディ・ハバードの作曲による壮大なスケールの楽曲である。同じく、フレディが書いたオリジナル曲に “One of a Kind” という曲が存在する。(タイトルが似通っているが) この 2 曲は全く異なる楽曲である。今回取り上げたこの曲 “One of Another Kind” は、私自身も東原力哉 (drums) Group に在籍していた 25 歳~29 歳の頃、好んで演奏した懐かしい思い出がある。

まず、主題は 25 小節からできている、ハーモニーチェンジは以下の通りである。

【Chord Changes of Theme】

	FM7 (b5)				Am7			
	Dm7				BbM7 (b5)			
	GbM7 (b5)		3/4		G7 sus4		3/4	
	A7 sus4				Bb7 sus4		G7	
	Fm7				Fm7			
	Fm7				EbM7 (#5)			

(25 bars)

【Chord Changes for Improvisation】

	FM7 (b5)				Am7			
	Dm7				Bb7 sus4			
	GbM7 (b5)							
	Gm7							
	Gm7							
	Fm7							
	Fm7				EbM7 (#5)			

(28 bars)

ハービーによるアブストラクトなピアノイントロダクション、次いでロンがオスティナート（反復ベースラインパターン）を奏でる。A-Aeolian（エオリアン）モードによるどこかオリエンタルな趣きのラインが印象的である。トニーが、リズムにより生命力を与え、主題提示を迎え入れる準備が整う。ウェインとフレディがユニゾンで荘厳な主題を奏でる。瞬間、聴衆の多くは鳥肌と共に歓喜の絶叫を上げる。このクインテットだけがなし得るエクスタシーの瞬間である。主題は2回反復され、いよいよ個々のインプロヴィゼーションへと突入してゆく。個々が繰り広げる宇宙大スケールのインプロヴィゼーション観は壮大で、自由で、あまりにも素晴らしい。

■ハンコックのインプロヴィゼーションパートについて

ジャズコンボにおけるアートフォームである「各奏者に受け継いでゆかれる個々のインプロヴィゼーション」は、各奏者が燃焼しきるマラソンのものよりも、より「駅伝的なチームワーク」が望ましいと私は考える。（60年代の Miles Davis Quintet がそうであったように、） The V.S.O.P. Quintet（特にこの演奏）では20分にも及ぶパフォーマンスの中で、フレディ (trumpet) のインプロヴィゼーション部分に重心があり、その後のウェイン (s. sax) は自身のインプロヴィゼーションで完結しようとはせずに (Interlude も挟まず)、ハービーにそのバトンを渡すが、どうやらその『連携プレー』の想いは100%反映されてはいない音楽的内容でハービー自身は終結してしまい、トニー (drums) に繋いでしまいます。結果として、trumpet 50%、s. sax 30%、piano 20% — というような熱の配分でドラムソロに突入となってしまっています。勿論、野外豪雨の中の Jazz Fes. という現況を考えると、このワイルドさも Jazz の魅力なのさ - と言ってしまえばそれもよし。しかし、60年代の Miles Davis Quintet に見られたその (個々のインプロヴィゼーションがセパレートに完結をなさないという) 連携プレーに、ある意味タイムレス (永遠) な音楽美を感じる聴衆にとっては、いささか不満足な内容といえるかもしれない。私的所感としては、フレディ (trumpet) はご自身の作曲による楽曲をオールスターメンバーで演奏できると張り切ってしまう、つついオーバーブロー気味なインプロヴィゼーションをとってしまい、ウェイン (s. sax) は、ハービー (piano) との連携での音楽構築完結を目指したが、その意思も100%は継承されず不完全燃焼でドラムソロへと、トニー (drums) は持ち前の精神的タフネスとそのタレント性を存分に生かし野外聴衆を歓喜させ、

最終主題提示に戻ったという構築のライブパフォーマンスであったように私には聴こえる。蛇足事項だが、この楽曲は私自身も大好きな題材で、27歳〜32歳の頃、東原力哉 (drums) Quintet に在籍していた当時、頻りに演奏していたので、たっぷりの愛着感と親近感を今もなお感じている。

■Herbie Hancock が語る “Miles Davis Quintet”

〜 V.S.O.P. the Quintet の音楽的類似性

以前、ハービー自身がマイルスクインテットの全盛時代について、臨場感溢れる体験談をインタビューで話してくれたことがあり、これはかなり興味深い話の内容であった。この V.S.O.P. The Quintet のバンドスタンド (舞台上) で瞬間瞬間に起こっている音楽的マジック (魔法) が、いったいどのような体感なのか? ということについて、1967年の原体験が、その12年後の1979年に再び体験! — という視点から読むと、V.S.O.P. The Quintet の魅力を垣間見れることにもなると確信するので、そのインタビュー内容を一部抜粋引用させていただくことにより、2グループの類似性を感じ取っていただければ幸いです。

Aug. 2011 田中 裕士 (Pianist)

【以下、インタビュー@ハービー・ハンコック談】

『Live at プラグド・ニッケル』を録音当時 (1967年)、ウェインは34歳、ロンは30歳、トニーは弱冠22歳だった。私も若くて25歳だった! エネルギーが一番激しく燃焼する時代だよ。そればかりでなく、この時のメンバーはみんな最高の人間関係でつき合えたんだ。音楽だけではなく、人間としてみんな気持ちを通じる関係になり合えた。こういう人間同士の出会いはそれぞれの人生で稀にしか起きない。出会った瞬間から全てがパーフェクトに作用し始めたんだ。バンドの音楽は短期間のうちにみんなが面白がるほど急ピッチで飛躍、発展し始めた。(中略) しばらくすると、何でも信じられないぐらいに難しいことが自由自在にやれるバンドになった。不可能はないというようなバンドにいきなり昇りつめてしまったんだ。(中略) あの当時は、音楽的に相手の意表をつくような冒険的なこともたくさんやった。どんなに大胆なことをやっても、みんなの創造力があまりにも高かった為に、不思議にそれが自然に融け込んで、かえって音楽に生気が生まれた。(中略) それほど、あの当時のマイルスクインテットはスペシャルだったんだよ! (インタビュー協力: ブルーノート東京)

以上

アナログにこだわる、銀座の老舗

「JAZZ COUNTRY」

東京都中央区銀座6-2-6 TEL. 03-3572-7684

営業時間: コーヒータイム PM0:00~5:00 (土曜日のみPM2:00~)

バータイム PM7:00~11:00 休み: 日曜日 (バータイムは土日も)

交通: 営団銀座線、丸の内線、日比谷線「銀座」駅、JR「有楽町」駅他

メニュー: コーヒータイム 珈琲・紅茶 500円、ビール 700円

バータイム ボトル 8000円 (チャージ 3000円)